

帰天者を樹液は追うか五月来る

田崎森太

帰天は、カトリックにおける死のこと。死ぬことではじめて樹にまなざされ、悼まれるのだとしたら、樹の涙であり、血でもある樹液は幹を遡るのだろう。

背中に咀嚼を感じて夜へ浮く

小野寺 里穂

見えない他者の物を喰う気配。ふいに露わな他者の生きている音を感じるとき、自らの生きる輪郭が脅かされ、揺らぐ。それは居酒屋や信号待ちの路上でも。

昼間には幻を見るほうなのに  
生家の窓辺でキスをしている

雲理そら

幻を打ち消すかのような窓辺の口づけ。生まれた家と恋人と、ここではあまりに肉体的な現実が根を張りすぎていて、見えるはずのものも見えなくなつて。

重力はビールの売り子には  
無いの

つちや

サーバーを担ぎ、階段を行き来する売り子。背負うビールは物見客らに飲まれ、歎声や罵声の感情の熱量によってスタンドはどよめきの無重力のただなかへ。

誰一人おなかすかせず花は葉に

檜野 美果子

桜が葉桜に。いつか桜はひとつ残らず散り消えてしまった。戦禍の子どもたちのすべてがこの世に満ち足りて去って行ったのだとしたら。叶わない夢の春。

豆という情けのなさよもう寝るよ

榎 隆太

豆に対して文句を垂れるような、ふて腐れるような。見めぐりのおそらく最小の食べ物へ投げかけるしか無いポーズはそのまま自分の不甲斐なさとも。

スクエアの私を父にするメガネ

カンゾーネ

四角いレンズは顔をシャープに、誠実に見せる。眼鏡をかけた私は父の顔になり、父の顔が私を社会的な父親として認める。父であるのは私が眼鏡か。

発言はすでにヨットに乗っている

平松 泥沸

一度、口から出た言葉はもう戻つてこない。手繕り寄せようとも、揚々と印象の帆を張つて沖へでてしまう。見えなくなるまで責任を持つて手を振るしかない。

振つた手があなたのものへと戻つてく 風、夜桜は意外とでかい

天野奏

誰かのために振っていた手をおろして、やがてあなたの手に戻る。もう別れすらも終わった。まだ肌寒い夜に桜は、感情の残像のように膨張して灯る。

水平に

なつたらおいで

スフィンクス

|

岸丸雷鳥

彼が身体を伏せるとき。それは死者を守る役割から解放される最期の瞬間だろう。おいで、そして自らのためだけに身体を横たえて眠つてほしい。